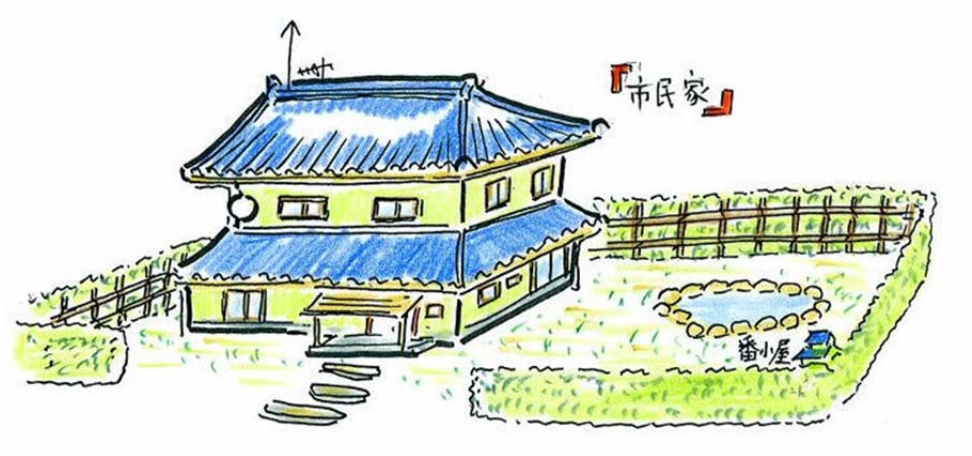
✦✦支援くんの火災予防奮闘記✦✦

これまでのあらすじ

物語を読む前にまずご覧ください。

物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。

　そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年５歳になる市民家の長女 援(えん)ちゃん には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

　点得(てんとく)幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！

援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦労の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

<u>主な登場人物</u>

援ちゃん　5歳

支援くん　　ご助（中間）

ミーちゃん（飼い猫）

ママ

パパ

閻魔様

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

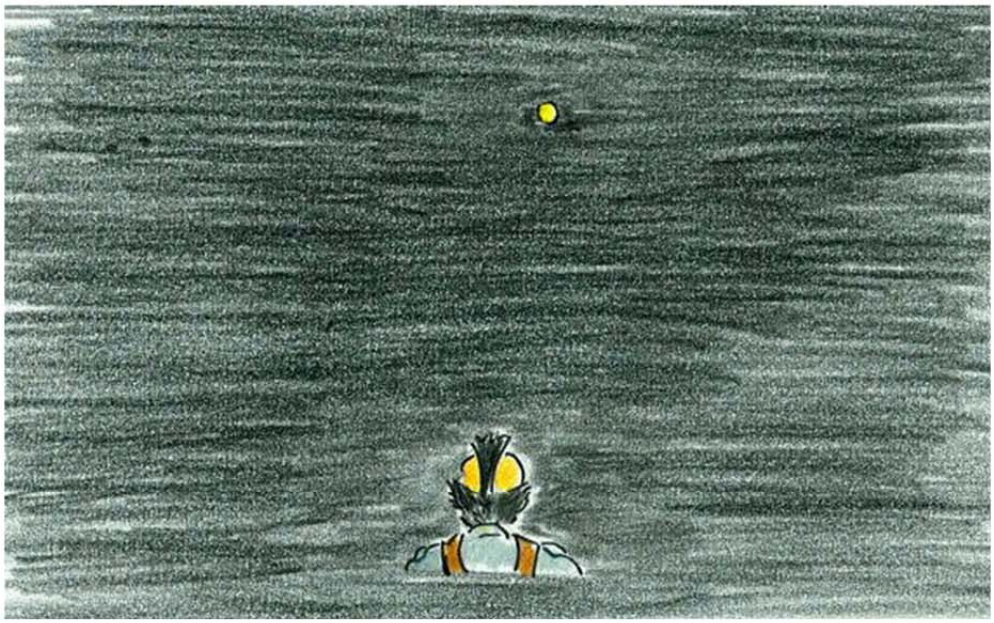
Vol.23

前号のあらすじ

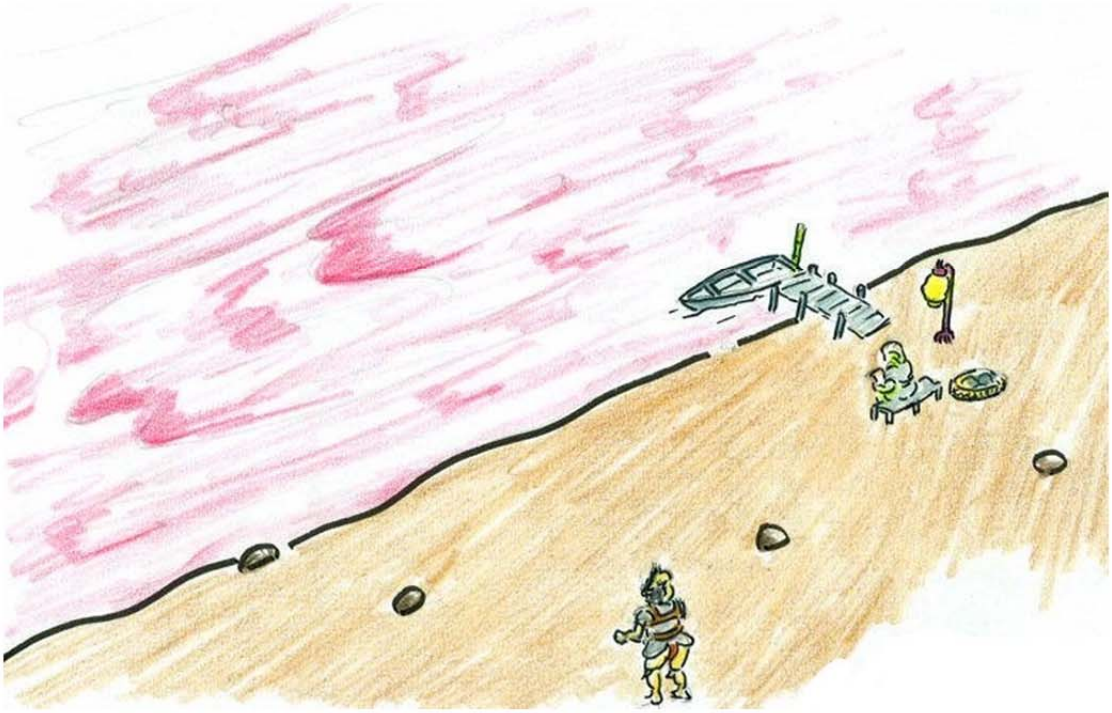
火伏詣でに出かけた「支援くん」を追い、秋葉神社に到着したご助は、稲妻の中に現れた獅子頭に驚き、逃げ込んだ床下で支援くんと再会する。内陣に置き忘れた旗指物と鋏箱を取りに戻った二人は、途切れた被雷針のワイヤーを繋いだ瞬間、雷神様の一撃を受け悶絶する。意識を取り戻した二人が漸くお屋敷に戻ると、飼い猫の「ミー」が雷神のお使いとそっくりなことに気づく。ミーを指鉄砲で驚かした支援くんに雷神様の怒りの一撃を喰らわすべく雷寄せの舞を踊るご助。自分だけ助かろうと単衣の下にアース線を隠し持ったご助だったが、踊りに夢中になるうちにアース線が抜けてしまう。支援くんの指摘で気づくが時すでに遅く、強烈な雷撃に襲われたご助は・・・

■■■▸　真っ暗な闇の中を　▸▸▸

ただ一人で歩いておりますと、遠くに仄(ほの)かな明かりが見えまする。



そちらを目指し、歩いてまいりますと、まことに大きな川の畔(ほとり)に出ましてな、とても泳いでは渡れそうにもなく、いかがしたものかと少し下流をば臨みますれば、確かに渡し舟が。



「おぉ助かった。地獄に仏とはこのことよ。」とあっしが渡し舟に近づくと川守のお婆が

「お客さん。早えぇですよ、まだ着いてませんぜ。」と言うので

「いやぁお婆殿、渡しがあって助かったという意味じゃ。」と言うのに

「そうかね。あたしゃまたお前さんがもう着いた気になっているんじゃないかと思いやしてねぇ。」と言うので

「着いた気？どこに？」と言えば

「へえ、この渡しの先の・・・」と凄んで来るのに

「わ、渡しの・・・先のぉ？」　ゴクリと生唾を飲み込み、恐るおそる聞き返しますと、

「この先の地獄にでさあね。」と言い放つとお婆の姿は西別院の

地獄極楽図の奪衣婆（だつえば）に！！

「ひいいいぃぃぃぃっ？！？！？！！！」

と、ここで目が覚めましたのじゃ。

「ゆ、夢・・・か？ひ、酷い夢じゃったのぉ・・・」と布団の中で起き上がると尻のあたりが妙に生温かく・・・

「ま、まさかっ、ま、またしても・・・？これも天罰かのぉ。」と敷布団のしみを嘆きながら、壁の日めくりを見るともなく見れば、なんと今日は８月の１５日、地獄の釜も開くと言う盂蘭盆（うらぼん）ではありませぬか。

いや待て、確か旦那様を迎えに秋葉神社へ向かいましたのが８月１０日じゃった筈。
そしてお屋敷の庭先で雷神様のイカズチに撃たれたのが８月の１３日。
であれば二日も気を失っておったのか？と横を見れば旦那様がスヤスヤと眠っておいでじゃった。

そのお姿を見るうちに
「こ、これは・・・もう、こうするしかあるまい。」
ありがたい雷神様と秋葉の神様に人の道を教えられたあっしではありましたが、性根という奴はなかなかに。

あっしは自分の布団を旦那様の隣に敷くと「えいっ！」とばかり旦那様の体をあっしの敷布団へと転がしたんでさ。

その途端、眠ったままの旦那様が

「うわぁーっ、閻魔様、ご助をお許し下さい！！」と叫ばれましたのじゃ。

「さても騒々しい旦那様じゃ。さてと・・・あっしは甘酒でも一杯引っ掛けてから旦那様の布団でもうひと眠り。」と好物の甘酒を 2 合ほども呑み干すと旦那様の布団にもぐりこみ、また直ぐに深い眠りへと就きましたのじゃ。

■■■▸　ううう・・・ま、またもや暗い道じゃなぁ・・・夢の中で嘆きながら、気づくとあっしは再び大きな川の畔に佇んでおりました。

近くの川原では見慣れぬ子供が小さな石を「一つ積んでは・・・」と悲しい声で積み上げておった・・・。こ、ここは！ま、またしても地獄にぃ？

「だ、だ、奪衣婆は！！」と恐れるあっしの背後で

「ひひひっ、もう帰れやせんぜ。ほれ牛頭(ごず)と馬頭(めず)が迎えに参りましたぞ」と渡し舟の上から奪衣婆が指さす方を見れば・・・牛頭と馬頭が子供が積上げた石の塔を蹴散らしながら近づいてきたのですじゃ！

「ひぃぃぃぃぃっ・・」と逃げ惑うあっしをいとも簡単に捕らえると牛頭と馬頭は地獄の門を潜り、閻魔(えんま)様の前へとあっしを引き出したのです。

何やら分厚い書類に目をとおしておられた閻魔様があっしへと目を移し、地の底から響いて来るようなお声で

「ご助よ。ここへ参ったこと、心当たりがあるか？」とのたまわれたのじゃ。

「まったく記憶にございません。」と言い切りながらあっしは、もしかしたらあれかも、それかも、これかも、いやきっとこっちかも・・・。と思いを巡らしておりましたのじゃ。

「それだけあれば十分じゃ。そうさな・・・おのれは灼熱地獄じゃな。」と閻魔様は書類に判を押そうとするのに

「え、閻魔様、あっしの話も聞いてくだせぇ！」とあっしは必死に訴えたんでさ。

しかし・・・「はい駄目ぇ。」と閻魔様が軽―い声とともに判を押すと、それを待っていたかのように牛頭と馬頭が灼熱(しゃくねつ)地獄へとあっしを引っ立てたのじゃ。

「ま、待って下せぇっ・・・！あっしは市民様のお宅で火災予防のお勤めをまじめに勤めて参りましたのに灼熱地獄はねぇでしょう！！」と喚いても牛頭と馬頭は訊く耳を持つ筈もなく、燃え盛る炎の前にあっしを立たせたのでさ。

「こ、ここに入るので？む、無茶でしょ。」とあっしが牛頭に申しますと「ほれ。」と馬頭があっしの背中を押してきたのですじゃ。

「うっうわぁーな、なにするんでぇ危ねえ。火傷するじゃねえですかいっ！！あちっ、あちちっ。ひいいい・・お助けっ神様、仏様、旦那様ぁっ」

と叫んだところで目が覚めましたのじゃ。

「ううぅ・・・ゆ、夢かい？ま、またも、酷い夢を・・・うあっちちちい？！」

悪夢から覚めたあっしの目にもうもうと布団から上がる煙が・・・。

「な、何じゃこれは？！ひいいっ・・・またしても寝たばこをしてしもうたか？！」

その時ですじゃ、『バンッ』と部屋の戸を勢いよくあけ放ち、部屋中が煙に包まれる中を旦那様が、

「ご助！大丈夫か？今助けるぞ！」という声とともに入ってこられ、手にした消火器であっしの布団と燃え出していた旦那様の布団の火を消し始めたのですじゃ。

「あああ・・・だ、旦那様ぁ、あっしはとんでもねえことを・・・。」と謝るあっしに

「ご助よ、怪我はないか？」と旦那様は優しく労(いた)わってくれるではありませんか。

「も、申し訳ありませぬ。またしてもあっしは寝たばこで旦那様にご迷惑をぉぉ」と言うと、

「寝たばこ？そちは寝たばこなぞしておらんじゃろうが。」と旦那様。

「へ？で、では・・・この煙と・・・火は？」とお尋ねしますと

「う、うむ・・・。実はしたんじゃ。」

「した？何を？」

「うっ、それ・・・お、おのれが火遊びして・・・したやつじゃ。」

「？？あっしが・・・火遊びで・・・ああ、おねしょですかい？」

「ば、馬鹿者！大きな声で言うんじゃない。それで乾かそうとしたんじゃ。」

「へ？乾かしていて何で火事になるんですかい？」

「おのれが気持ちよさそうに寝ておったから、布団乾燥機は音が出るじゃろ。それでアイロンで乾かしておったのよ。」

「アイロンで・・・それで忘れて・・・ばっかでぇ！なにやってるんですか旦那様ぁ。」

「ば、馬鹿に馬鹿と言われるなど屈辱の極みじゃが・・・おねしょを・・・。」

「いひひひっ、ば、馬鹿だねぇ旦那様は、あれはあっしのおねしょで！！！

あわわわっ！」

「なにっ、今何と言った？やはりあの少し甘酒の香りがするおねしょはおのれのか？」

「あわわわ・・・。だ、旦那様・・・こ、これには深い訳が・・・。」

「深い訳などないじゃろうが！おのれのせいで布団は燃やすわ、アイロンは壊すわ、消火器はぶちまけるわ！！一体どれほどの損害じゃと思うておる！！！」

「へへ・・・だ、旦那様・・・そんなに怒らねえで下せえよ・・・。ア、アイロンは壊れてねえかもしれませんぜ。早く出した方が良いですぜ」とあっしが申しあげますと旦那様は、

「そ、そうじゃな。」と言いながらアイロンを仕掛けた布団へと向かわれ、それに続いたあっしが

「おっと・・・。旦那様気を付けて下せえ。消火器の液でベチャ・・・」とご注進申し上げようとしたその刹那

「！？・・・でっえええ！」とあっしの体を電撃が貫いたのです。

見ると青白く光るあっしの隣で同じく青白く光る旦那様が

「ひつ、ひいい・・・。ご助よ・・・で、電化製品・・・は・・・プラグを抜かんとのぉ・・・。」と叫んでおられたのじゃった。

「だ、旦那様ぁ・・・あっしらも・・・こ、懲りないですなあぁ・・・。」

■■■▸　ううう・・・ま、またもや暗い道をトボトボと・・・ですが今回は

旦那様もご一緒で

やがて牛頭馬頭に連れられ再び閻魔様の前へ

二冊の報告書を交互に眺めておられた閻魔様が面倒くさそうに

「またお前らか・・・何の用じゃ？」と聞いて来られたのじゃった。

「せ、拙者は特に何も・・・」と申される旦那様に

「うむ。雷神に撃たれたご助を助けてやってくれという無茶な頼みも信仰の厚い支援じゃから訊いてやったのじゃからな」と閻魔様。

「ぼすけよ。おのれには盂蘭盆とお彼岸の二度もチャンスをやったとゆうに改心の兆しがが見えぬ。もいっぺん炎にあぶられて行くか？」と棒笏であっしのおつむりをはたきながら判決書に判を押されにかかるのを

「ま、まった・・・いや、待って下せいましぃっ。も、もう金輪際悪心は起こしませぬ。旦那様の言いつけは喜んで致しますからっ！」と必死におすがりしたのですじゃ。

その時でさ・・・あの聞きなれたお声が・・・

「・・・ちえん、こりで良いのきゃ？」と閻魔様のお声が、姫様のお声と変わっていったのですじゃ。

「ぼすけ？ちえん？・・・閻魔様？・・・え、え、援ま様？！！」というところで目が覚めましてな・・・。見ればあっしの枕元で姫様と旦那様が台本を手にして笑っておるではありませんか。

「ひ、ひでえですぜ姫様も旦那様も。」とあっしが言うと

「何がひどいものか、おのれのおねしょを主人になすりつけるなど、おのれの性根を叩き直すため姫様にお願いしたのじゃ。どうじゃ懲りたか？」と旦那様。

「へええっ！」とあっしは頭を下げつつ、懐から暦表を取り出すと神無月（１０月）の９日日曜日が仏滅なのを確認しておりましたのじゃ・・・何でかって？　いえね、神様も閻魔様もお休みの日を選んで仇をうたねば・・・今度こそあっしの番でさ！

（おわり）